研究紀要 2014年 第５号 pp.63～70

F.フレーベルにみる男性性･女性性

―1810-1820 年代の論考を基に―

松村 納央子

Über Männlichkeit und Weiblichkeit von F. Fröbel auf Basis der Abhandlungen der 1810er und 1820er Jahre

Naoko MATSUMURA

１．問題設定

19 世紀のドイツ文化圏においては、近代市民家族の形成に伴い、公領域と私領域との分離、家事・育児に対する新たな価値観が形成されたと言われる。この社会構造や家庭構造の変化に伴い、いわゆる「母性の囲い込み」もみとめられるようになった。1840 年代、その囲い込みを意図的に解消しようとするドイツ文化圏における女性運動は、F. フレーベル（Fröbel, F. W. A. 1782-1852）の幼稚園教育との親和性が高かった。1840 年に開設した幼稚園の実践や『母の歌と愛撫の歌』(1844 年) で示された生活は､女性に新たな生活様式･行動様式を示唆するものでもあった。フレーベルは女性幼稚園教員（Kindergärtnerin）の養成にも尽力し、当時の女性にとって市民社会における新たな地位をひらく助力となったのである。

ところで、女性幼稚園教員に対する思想的基盤を与えたフレーベルの教育活動を特徴づける用語として「教育的家庭（erziehende Familie)」が挙げられる。この家庭は父・母・子によって構成されるが、幼稚園開設以前のカイルハウ教育舎での実践でも、既に疑似家庭を演出してきたことが６編のカイルハウ小論文（1820-1823 年）ならびに週刊誌『教育的家庭』（1826 年）からもうかがえる。

本邦の先行研究では岸が既に人類の完全性と統一という到達点へむけてフレーベルが家庭にどのような機能を見いだしていたかを考察している。この考察においてはフレーベルの経歴・育成歴を参照しながら彼の母性への憧憬を指摘している [1]。また、江玉は「教育的家庭」幼稚園の教育実践との連関に焦点化して考察している [2]。これら先行研究においては球体法則観や後年の生の合一観との連関が既に指摘されており、父性と母性は対立しつつも合一に向かう存在であるという見解において一致している。本論はその見解を否定するものではない。しかしながら、本論で考察対象とするのは、認識論ともいえる球体法則観の領域から人間形成の視座へと展開する際にフレーベルが男性と女性をどのように定置したか、という点である。

弓削によれば、18 世紀末に男女の「性」が人間学ないしは人類学の領域をはじめ、学術的に考察され始めた [3]。18 世紀末のヨーロッパの思想圏において社会的存在としての理想像である人類（Menschheit）を考察する際に性差も考察の対象とされたのである。こうした文脈を踏まえ、フレーベルは父や母となる以前の成人としての男性性・女性性をどのように位置づけたか、その

上でどのように教育の領域へと展開したのであろうか、という点が本論の問題関心である。この問題関心において看過できないと思われるのは、球体法則（das Sphärgesetz/ das Sphärische Gesetz）に関する命題における男女の特質に関する記述である。

以上より、本論では1810年代に成立した球体法則観に関する資料に着目し、男性性・女性性に関するフレーベルの思考形成の一端を明らかにしたい。その上で、「教育的家庭」における男性性ならびに女性性に関する彼の議論を再考したい。

２．人間のふたつの極性に関するフレーベルの論考

フレーベルが男性存在と女性存在とに関して思考実験を試みたのは、ゲッティンゲン大学に籍を置いていた1811年である。1811年８月、フレーベルは27項目にわたる命題を記している[4]。この命題にいたるまでの思考実験において、フレーベルは諸現象の源泉に神を定置している。その座をｘとして、そこから時間と空間とに応じて＋極と－極とが同時に現出する。ｘとそれぞれの極からの（概念的な）距離は同等であるが、その現出方向は正反対である。この点で、＋極と－極は対立している。現出様態によって特徴づけられる対立の一例としてフレーベルは拡張（Extensität）と集中（Intensität）とを記している（図１）[5]。それぞれの三角形の頂点は、諸力の現出点を示し、三角形内に描かれた円が中心点ｘである。この図式において、拡張と集中の三角形が示す方向はそれぞれ反対方向である。この対立が「性別を規定する」[6]根拠であるとフレーベルは推論した。

フレーベルは、＋極に拡張的性質を、－極に集中的性質を付与した。さらに、拡張的性質を男性極（männlich p）、集中的性質を女性極（weiblich p）とした。それら極性が中心点ｘから等距離に定まる状態を婚姻（Ehe）という語を用いて論じている。図３はその思考過程において記されたものである[7]。

図１

図２[8] 球体の赤道において

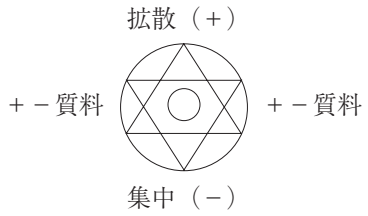
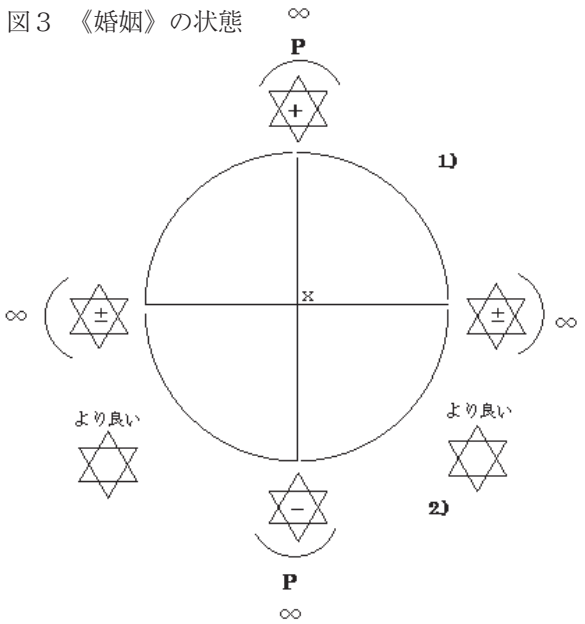


図３　《婚姻》の状態



婚姻の状態にある球形の北半球は拡張の領域であり、南半球は集中の領域である。また、フレーベルによると、この球形の西半球は精神的・道徳的領域を、東半球は身体的領域を示している[9]。これらが婚姻の状態にある限り、概念的には球体の状態にある。そして、球体で捉えられるものは、調和の状態にある。図３での＋極に配置された円弧と∞の印を付された六芒星は男性的な性質が安定した状態を、－極に配置された円弧と∞の印を付された六芒星は女性的な性質が安定している状態を示している。さらに、球体の赤道に配置された円弧と∞の印を付された六芒星は、東側に配置するものは物理的・身体的な調和、西側に配置するものは精神的・道徳的な調和の状態にあることを示している。従って、図に単なる六芒星として描かれているものは「より良い（besser）」との言葉が書き付けられているが、完全な状態を示すものではない。フレーベルにおいて、理念として完全なるものは図２のように理念として諸力が六芒星で図示できるように調和した球形として図示される。

球体にかかわる思考実験の過程で、フレーベルは拡張の性質を持つ男性（Mann）に悟性（Verstand）を、集中の性質を持つ女性（Weib）に感覚（Empfindung）をその特性として付与した。さらに、男性と女性に見いだされる性質に関して、1811 年８月時点での球体法則観において「学問（Wissenschaft）」の考察も注目に値する。フレーベルは「学問」について、「知るということは学問ではない。-schaft という接尾辞は多様なものの統合を意味している」のであり、「精神を通じて知るということはまだ学問ではない。感覚を通じて知るということもまだ学問ではない。双方が結合して、学問である」[10] と記している。以上の思考実験を経て、第 18 の命題「婚姻のみが、完全なる学問である」、第 19 の命題「学問は婚姻と同様に完全であればあるほど、純粋で、完成され、なにより幸福なものである」、第 21 の命題「それゆえ男性と同様、女性は学問へ、そしてその学問の貫徹へ向かうよう規定されている」が記された。

３．生活にみられる男性と女性の特徴に関する論考

リュッツォー義勇軍への入隊と従軍の体験（1813-1814 年）以降、フレーベルの思考実験は法則性の認識に関する考察において数学的・自然諸学的な性格を強くすると同時に、考察の射程を人間の諸行為にまで延ばした。言い換えれば、フレーベルは球体法則に支配された環境で生活する人間の諸行為について、男性に顕著なものと女性に顕著なものとを特徴づけようと試みたのである。従軍体験に加え、1813 年にフレーベルの兄が３人の子を残して他界し、その妻から養育を助けてくれるよう求められたことから、1816 年自然科学研究を退き学園を設立することとした。それが一般ドイツ教育舎である。学園経営に着手して以降、フレーベルは自身の結婚も考えるようになり、ベルリン大学の開講講義を聴講していたヴィルヘルミーネと 1817 年以降連絡を取り合い、1818 年９月に両名は結婚する。こうしたことを踏まえると、フレーベルは教育活動に従事して以降、球体法則観における男性性・女性性ならびに婚姻の概念を、さらに実際生活においてはどのように展開するものか考察を進めたと思われる。

1811 年の思考実験では、既に男性には拡張を、女性には集中をその特性としてみとめていた。1818 年２月、フレーベルは以下のような問いを設定し、自答している。

あらゆる活動、あらゆる生、それらは被造物たる人間の存在表出である。が、人間の使命はどのような方法で神から授けられうるのか、また授けられてしかるべきなのか？

a）内から：なぜなら、神は人間のうちに息づいているから。

b）外から：なぜなら、人間は神のうちに息づいているから[11]。

この自答は、さらに男性と女性との差異に及ぶ。

人間は男性と女性とに生まれる。人間において生命の表出（Lebensäusserung）の規定はどう分かれるのか？

男性においては神の中の人間の生によって、女性においては人間の内なる神の生命によって[12]。

先に引用した文章の「神」は事物の法則性と置換可能である。そう解釈すると、男性は拡張という特性ゆえに、球体法則によって成立している諸現象へ近づき、推論する性質を備えている。従って、男性は「神を基盤とする自然における生」[13]を営み、表出される多様な事物が存在する領域で活動する。他方で女性は集中という特性ゆえに、「女性の内なる神の生によって、女性の中の神の影響によって」[14]内省的な領域で活動する。論文「1836年は生の革新を要求する」において示した、その本質を常に多様性や多面性において表現しようと努めるという男性の特質、ならびに永久にあらゆる多様性を自分の中でひとつに結合し、織り込むという女性の特質の萌芽がここにみとめられる。

以上の思考実験を通じて、フレーベルは単なる二項対立図式ではない男性性と女性性との連関を提示した。これは、ペスタロッチーやヘルバルトとの男性・女性の定置とは異なる特性を踏まえていると思われる。小玉は、「特別の配慮が必要な」「保護されるべき」という近代的な《子ども》像が想定されて以降、ペスタロッチー（Pestalozzi, J. H. 1745-1827）においても、またヘルバルト（Herbart, J. F. 1776-1841）においても男性・女性・子どもという家族関係は不均等な三者関係として構成されたと指摘している[15]。ペスタロッチーは『母の書』（1803年）において、母の自然とそれを統率する父の理性から教育愛を構成した。そして、ヘルバルトはこの三者関係を『一般教育学』（1808年）においてさらに先鋭化した。彼は、無秩序のなかで教育は成立しない、という見解から出発する。ゆえに教育が成立するには管理が必要である。特に、家庭教育において管理は権威と愛とを条件とする。権威は父親に属するものであり、家のなかのすべてが父親の支配下にある。家庭のなかにあっても「精神の優位」は父に存在する。一方、愛は母親に属するもので、女性の属性である「繊細な感じやすさ」によって子どもの心的状況を感受する。ヘルバルトは属性や能力を単に分業するのではなく、父親の支配・管理を明確にした。他方で、「子どものために」という文脈において母親に高い価値を認めた。小玉に従えば、ペスタロッチーもヘルバルトも、基本的な態度としては家庭教育において父親の優位性を打ち出している。

それに比べ、少なくとも1810年代のフレーベルの思考実験においては男性と女性の特性を区分するものの、教育においてどちらがより優位かということは言明していない。子どもを中心と

して、男性も女性も等距離性を有するものとされる。両性の特性に応じて父親と母親の教育的機能が定義づけられているのである。

４．フレーベルによる「婚姻」の教育（学）的含意

1826 年、フレーベルはカイルハウ教育舎において週刊誌『教育的家庭』を出版する。この中に「婚約（Vorlobung)」と題された小論文が掲載された。この論文の冒頭で、フレーベルは「家庭生活のなかのことがらや祭りごとのうちでも、最も美しく最も賛美されるものは婚約日である」[16]と明言する。婚約は、男性にとっても女性にとってもそれまでの生活を省み、新たな段階へと進む一契機として位置づけられた。男女ともに個人としての「外的な生活」を統合するという段階への端緒とされた。

この小論においては女性性を「人間の品位を自己のうちに予感しており、至高なものを唯一の感覚として自己のうちにいだきはぐくみつつある、そしてこの両者のために光や明晰、形および発展を熱望している」点に見いだした。他方男性性は「人たるものの本質および使命を、また人間性の観念を革新し、それを自己の根本思想として認めており、そしてこの両者のために生命と表現と発展と現実とを切望している」点に見いだされる[17]。これらは等しく価値を有するものとして、優先順位を与えられるものでもなかった。この男性性や女性性を意識する契機として婚約や婚姻が設定されたのである。

このような論考から、フレーベルは男女の「婚姻」に人間形成上の新たな意義を付与した、という歴史的意義がみとめられるだろう。フレーベルに従えば、「婚姻」とは人間の諸行為を統合する意識的な状態である。「婚姻」によって男性は「妻を常に一層生き生きと、一層神と密接な、神を感じ取る女性」になるよう、他方で女性は「夫を常に一層明晰で活力ある、信仰心篤く、神に忠実な、神のうちに憩う男性」になるよう、またそうであるように互いに努力する[18]。フレーベルは夫婦に相補的・互助的な関係を期待したのであった。

そして、フレーベルにとって「婚姻」とは、日常生活つまり家庭において法則性（神性）を再現するための「内面的な」結合である。このことは、「婚姻」によってこの世にあらわれる子どもによってさらに強化される。男女一対がそれぞれ極として存在し、それぞれが二人の生活圏の中心を貫くスポークとなったとき、子どもはその中心点 x に現出する存在として現出する。また、球体法則観においては、人間は神に対して被創造物であるばかりでなく、「子ども」とも位置づけられる。「婚姻」によって子どもを産み、育てるとき、人間はより神に近しい存在として法則を認識し、また内省的に感じることができる。こうして、共同体を構成する小単位である家庭において、世代間継承がなされていくのである。

「婚約」ないしは「婚姻」という語に暗示されるように、フレーベルにとって「教育的家庭」は、男性性と女性性の意識的な継承を意味するものである。そして、神の座である中心点 x を子どもの内に見いだし、その法則性を再確認する一契機をも意味するのである。

註

[1] 岸信行「フレーベル教育学における『家族』の教育的機能について―外界認識の高揚と世界関連への指向性―」順天堂医療短期大学紀要 2、1991 年、83-95 頁所収。

[2] 江玉睦美「フレーベルの『教育的家庭』育成論」人間教育の探究 11、1998 年、37-54 頁所収。

[3] 弓削尚子「『啓蒙の世紀』以降のジェンダーと知」姫岡とし子・川越修（編）『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店、2009 年所収。

[4] 1811 年 8 月 2 日付の 27 の命題は、以下のとおりである（Aus: Tageblätter Ende Juli bis Jahresende 1811. Quelle III. Sternenbogen *-*****. Org. BN 5. In: Hoffmann, E./ Wächter, R.（Hg.）: Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften. Bd.5. Briefe und Dokumente über Keilhau. Erster Versuch der Sphärischen Erziehung. Stuttgart 1986, S.355f）。

1．全宇宙を通じて、ただ一つの原理のみが支配している。

2．この法則は、プラス（＋）とマイナス（－）の法則、あるいは対立の法則である。

3．この法則は、中心からあらゆる方向へと同時に現出し、あるいは、球体的に現出する。

4．存在する万物は、この球体的法則の支配下にある。

副次的命題：その本性において球体的ではないならば、それは自ずと無に帰す。

5．全宇宙は、球体的である。

副次的命題：そうでなければ全宇宙は自ずと無に帰すであろう。

6．永遠の創造者の座はその中心（にある）。

副次的命題：あらゆるもの全ての本性は全ての面に従って、同じ活動半径の中に現れる。その結果、創造者の座は中心である。

7．存在する全てのものは、その本質―存在―に従えば、永遠なるものそれ自体と同様に古く、従ってそれ自体永遠である。

副次的命題：存在する全てのものは、ただ神によってあり、昔からのことである。それゆえ、神は永遠に等しく、神は神的本性である。よって、存在するもの全ては神と同様不滅である。

8．すべての人間の認識、すべての学問は、単一である。

9．学問でさえ、自らのうちに、万有の本性そのものと同じ有機的機構を有しており、万物の本性そのものと全く同じ法則の下にある。

a）学問は自ら（1）、（2）、（3）、（4）を発展させる。

b）学問は球体的形態を持つ。

10. あらゆる人間は、全知識を壮年期に包括するよう規定されている。

a）完全な学問に到達しようとしている人間は皆、学問を自らの内に見いださねばならない。

b）また、この学問を自ら形成しなければならない。

c）学問として現に存在しているものは、ただ人間に（道しるべのように存在している？）。

d）我々の外部に存在する学問は全て、我々にとっては仮説的なものである。

e）ただ、我々人間の内にある学問が真の学問である。

11. 人間は、それ以外の人生段階においては人類に生きるべく規定されている。

12. そのように人間は、自己自身を生きるのである。

13. 人間と人類とは、ひとつであり、同じものである。

14. 人類と永遠なるものは同一である。

15. （我々が知っている存在の中で）人間において自然の原理、すなわち対立は、最も確実に現出する。

16. それゆえ、人間は全宇宙を自らの内に受け入れるべく、追創造すべく、創造されているのである。
17. これを行うことが、唯一、学問なのである。
18. 婚姻の中にのみ、完全な学問は存在する。
19. そして、学問は、婚姻が純粋で、完全で、幸福なものであればそれだけ完全なのである。
20. 婚姻は、同分母を有する対位するものの結合である。
21. 女性は、男性と同様に、学問および洞察へと向かうべく規定されている。
22. 学問の全ての命題は容易に、明白なことに普遍的に理解できるものである。そして学問の全ての命題は最も単純な数学に基づいている。
23. 学問は哲学と芸術を統一する。
24. 双方が統一されることなしには、いかなる学問も不可能である。
25. 地球の外側に支点をひとつ与えられたなら、地球を動かしてみせようというアルキメデスが正しいとすれば、―現在の（…？）記録や記憶の哲学をその支点から取り除くことは容易である。記録や記憶の哲学は地球の中心点でもなく、ましてや万物の中心点でもない。我々は万物の中心にてこを移すならば、脆弱な思想体系は崩れ落ちるだろう。
26. 全ての学問は永遠の、そして決して時間に束縛されない目的を有する。
27. そのことはそこに始まり、そしてその地点に存続し続ける。

なお、この命題は山口の著述にも引用されている。その原本は Rinke 編集のものである（Vgl. Thesen über das sphärische Gesetz, Wissenschaft und Philosophie. 2. August 1811. In: Rinke, Alfons: Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluss der Romantik. Langensalza 1935, S.117f　山口文子「『球体法則』思想の定式化と進展」同『F. フレーベルにおける遊戯思想の成立と展開に関する研究－教育思想的および音楽教育的考察－』岩崎学術出版社、2009 年、50-51 頁参照）。日本におけるフレーベル研究にあっては、球体法則観による命題はながらく Rinke 編集版を底本としてきたが、Hoffmann 版は Rinke 版以上に原典に忠実であることが判明している。

[5] Tageblätter Ende Juli bis Jahresende 1811. Quelle I. Bogen I bis VI. Org. BN 6.; Bogen III. In: Hoffmann, E./ Wächter, R.（Hg.）: Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften. Bd.5. Briefe und Dokumente über Keilhau. Erster Versuch der Sphärischen Erziehung. Stuttgart 1986, S.320

[6] Tageblätter Ende Juli bis Jahresende 1811. Quelle I. Bogen I bis VI. Org. BN 6.; Bogen I. In: Hoffmann, E./ Wächter, R.（Hg.）: Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften. Bd.5. Briefe und Dokumente über Keilhau. Erster Versuch der Sphärischen Erziehung. Stuttgart 1986, S.315

[7] a.a.O., S.321

[8] a.a.O.

[9] a.a.O., S.318

[10] Tageblätter Ende Juli bis Jahresende 1811. Quelle II. Bogen A bis W. Org. BN 19.; Bogen D. In: Hoffmann, E./ Wächter, R.（Hg.）: Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften. Bd.5. Briefe und Dokumente über Keilhau. Erster Versuch der Sphärischen Erziehung. Stuttgart 1986, S.335

[11] Thesen über Gott und das Leben in Gott. 11. Februar 1818. In: Rinke, A.: Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluss der Romantik. Langensalza 1935. S.121

[12] a.a.O., S.122

[13] a.a.O.

[14] a.a.O.

[15] 小玉亮子「ジェンダーと教育」姫岡とし子・川越修（編）『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店、2009 年所収。

[16] Die Vorlobung. In: Lange, W.（Hrsg.）: Friedrich Fröbels gesammelte pädagogische Schriften. Abt. 1, Bd. 1, S.345（荘司雅子・藤井俊彦（訳）「婚約」小原國芳・荘司雅子（監訳）『フレーベル全集』３巻、玉川大学出版部、1982 年、274 頁）

[17] a.a.O., S.347f（同、278 頁）

[18] Thesen über Gott und das Leben in Gott. 11. Februar 1818. In: Rinke, A.: Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluss der Romantik. Langensalza 1935. S.122

付記　本稿は 2013 年 9 月 11 日、日本ペスタロッチー・フレーベル学会第 31 回大会自由研究発表（於　北星学園大学）にて発表した内容に、加筆修正を加えたものである。
また、本論は JSPS 科研費 25381056 の助成を受けたものである。